

# 哲學研究

第四百三十三號

第三十七卷  
第十一冊

## 普遍、概念、意味(完)

森口美都男

### 八

普遍とは何であるか。また概念とは何であるか。否、それらはそもそもあるというべきものであろうか。若しあるといわねばならぬとして、それではそれらは如何なるあり方に於いてあるのであるか。私たちが上に吟味して來たのはこの様な問いであり、これに對して過去に與えられたいくつかの答えてあつた。そしてさらに、そこから生じてきた新しい問題、またその解決への可能性の方向であつた。——それは、「意味問題」にどの様な示唆を與えるであらうか。

私たちはここで、凡そ意味というものを、普遍とか概念とかとの關係に於いて考えようとする。こと自體の權利を改めて辯明せねばならない。普遍ないし概念とは、述語される語の意味にほかならないといつた人々の數多の例を、私たちが既に知つてゐるにしても、この三者の必然的な關聯をより明確に規定することが要求されるであらう。さもないとば、普遍問題の考察から意味問題に何らかの指示を讀もうとすることは、意味問題を故意に變形することであり、

或はせいぜい循環であると云われうるであらう。

しかしまずこの種の循環、即ち探究手続きに關する批判的反省的な側面と、事象内容についての形而上學的定説的な側面との循環は、むしろ哲學そのものの性格に根ざすものであつて、如何なる問題の場合にも、私たちがこの循環の外へ出切ることはできないというべきではなからうか。(論理實證主義は勿論、分析哲學の立場も、それが高度に批判主義的であるにもかかわらず、それ自身が實は形而上學的前提——科學への無條件の信頼は一つの形而上學的前提である——に立つているということは屢々指摘される所である。)<sup>(1)</sup> 今の私たちの問題についても、普通、概念、意味の內的聯關は、何らかの自覺的な方法的規準の上にたつた上で、始めて取り出されうべきものであると共に、しかも、この方法の限定(むしろ探究方向の企て)自身が、豫め三者の事象的聯關についての何らかの豫想に支えられているほかはないと思う。

こういうより根本的な(あらゆる哲學探究に共通な)問題を自覺した上で、「意味問題」が、特に普通や概念との聯關において考えられてよい理由を、ここでは次の様に考えておきたい。それは二つある。第一には、ことばの意味といふことが、すぐれて問題性をあらわす場面が、一般名辭(特に述語たりうる)という言語要素にほかならなからである。一般名辭とは、先に、「知ることにおいて、知る個物と知られる個物との間へ介入して來る第三項」と云つたものの言語的表出である。第二には、この一般名辭についてこそ、それが實體化せられる傾きが常につきまがつており、そこでこそ意味といふことがすぐれて問われるのであると共に、しかも意味といふ事からの特質が最も覆われ易いと考えられるからである。

ことばというものを主題的に問題にすれば、凡そどの様な場面にも意味といふことが根本的契機として立ちあらわれにくるとして、また、ことばが働く所には、どこに限らず、そのことばの意味が語られうるとして、一般名辭はことばの要素の中で、云わば中樞的な位置をしめる。今、ことばが意欲的に、又情動的にはたらく場合を一應別としてい

えば、ことが働くという時、それはまず、常識的にも文としてであると考えられる。意味をなすといわれることは文である。しかし文は、一般名辭（狹義の述語と他動詞、前置詞などの關係語）を缺いてはなりたない。文の要素には、勿論、一般名辭の外に、本来他について述語されることなく、單獨ではただ主語の位置にのみ立ちうる固有名詞、繫辭 (be)、さらに冠詞、量化詞 (some, every)、否定詞、助詞 (テニヲハ)、接續詞 (基本結合) の如き統辭語が含まれるであろう。又語順や語尾變化の如きものも、それ自身ことばの契機である。これらの要素のことばにおける役割が僅少であるとはいえない。しかし、一般名辭以外の要素は、それを含まずに意味をなす文をつくることが可能である。

またこれらについても、それらがことばの契機である限り、勿論それぞれについて意味するということが何程か問題になる。ことが働くということ、それが意味をもつということとは同じことである。しかし、これらの中、固有名詞が、意味、或は、意味するという事態に比較的疎遠であるということは明かであろう。何人も、固有名詞の意味を尋ねることはしない。固有名詞 (例えば「ソクラテス」) を定義するという云廻しは不自然である。若し、ある固有名詞について、「このことばの意味はどういうことか」と問われるならば、私たちは「それは固有名詞だ」といへば済む。固有名詞は、本来何かを「意味する」のではなく、何かを「名指す」に過ぎぬからである。ある固有名詞が「誰を(何を)指すのかが分らない」時にも、私たちはその固有名詞の「意味が分らぬ」とは云わないであろう。固有名詞は「意味」が本来問題性を表す場所ではない。

繫辭として用いられる be, sein も一般名辭であり、述語(少くもその一部)でないかどうか、しかしまた他の述語的一般名辭と同種のそれであるか否か、——この問題が、形而上學的にも論理學的にも最も深く困難な問題である事は指摘するまでもないであろう。語「ある」は、實在を表す場合、存立を表す場合、等價を表す場合、個物のクラスへの歸屬を表す場合、下位クラスの上位クラスへの包括を表す場合、物について性質の所有を表す場合、含意を表

す場合等々、そのどの一つについても容易ならぬ問題が直ちに窺ひかれる。「ある」の意味 *Sinn des Seins* こそは唯名説の問いかえしという問題から、「はたらき」としての「ある」を取上げた時、既に私たちが問うていた問題である。しかし今の聯關では、「ある」が述語であるにせよないにせよ、それは、私たちが意味問題を普遍問題との聯關において問うことを權利づけはしても、否認する心配はないといつておけばよいであろう。

統辭語は、屢々なされる様に一般名辭の中に含めることができる。また統辭語と範疇的名辭との親近關係を考えれば、これまた意味を普遍問題との聯關で扱おうとすることに對して、支持を與えこそすれ、何らの障害となるものでもない。しかし、統辭語は、それ自身獨立に述語としては働き得ないが故に、普通に私たちが一般名辭のもとに解している述語的一般名辭とは區別されねばならない。それらは中世に於いて *categoria* に對し *syncategoria* (共に述語されるもの) として區別されたことばの群である。これらに於いては、「意味の意味」ということが勿論問われうる。それは「意味」に疎遠ではない。否むしろ、これらのことばは、本來、ひたすら「意味する」狀況の中にのみあるといつてよいのである。ここには、「意味する」ことだけがあるのであつて、「名指す」ということは、本來見られない。しかし、それと共に、*syncategoria* は、意味の探究が陥り易い危険からも免れてゐる。それらは、直接には個物にかかわらない(述語されない)が故に、それらの意味が「もの」或は「すがた」として固定される危険は本來存しないであろう。統辭語は、それがあゝる種の普遍、或は概念を指すとして見られる場合(例えば『普遍』という名辭自身は何を意味するか」という定式の問いにおける如く)にも、却つて普遍や概念を、對象ならざるものとして、むしろある操作、或は「はたらき」として見る方向を示すであろう。

しかるに、述語として的一般名辭については、「意味する」ということの特質と共に、その探究の困難が顯著な仕方であらわれてくる。言語的表出としての述語は、特にそれが單語として文から切り離される時、或は一般名辭が、一般命題の主語となる時、その意味するものが、名づけられるものとして固定されようとする傾向を伴うからであ

る。述語的一般名辭は、云わば、固有名詞と統辭語との中間にあつて、個物へ直接にかかりつゝ、個物をこえるといふ二重性格をもつ。私たちはこの曖昧な性格を「知られる個物と知る個物との間に介入する第三項」という曖昧なことばで示しておいた。固有名詞と同じく、述語的一般名辭は、それが述語される個物については、個物の名として機能する。それは、多數個物の共有する名であり、多をたしかに共に「名指す」といわねばならぬ。中世で、特に *suppositio personalis* と呼ばれたのは、名辭の、この様な實の個物への、それを名指し、代表するかがかり方（即ち外延的指示）であつた。

述語的一般名辭こそは、「この語は何を意味するか」と本來問われうる如き名辭である。この問は、どの個物を現示する *ostendere* ことによつても満足させられない。名辭は内包をもつといわれる。述語は、個物ならぬ何かを、表出し、それへかかると考えられる——即ち、私たちのいう第三項というものへ。しかし、こゝに名辭が、實の個物へのかかり方と同じかかり方をもつて、この契機へもかかるとされる危険が生ずる。ことばの、名としてのはたらきが身近かであるだけ、それだけ名辭は、この契機を實のではなくとも何らかの固定的存在者として「名指す」といふ風に見られるのである。凡そ名指されるものは、本來「このこれ」として現示されねばならないのであるから、この場合、多數の實の個物にゆきわたつた性質とか、個物の屬する類（クラス）とかが、「このこれ」といふ性格をもつものとして、かの第三契機からして云わば結晶させられる様になる。述語的一般名辭は、ともかくその一面に「名指す」といふはたらきをもち、それ自身一般命題の主語ともなりうるが故に、この傾向は、むしろ必然的でさえあらう。普通實在説や多くの概念説のとつた主張のよつて來る理由がここに見られる。

述語たる一般名辭が單獨化され、それが何かを「名指す」と見られる時に、かの第三項が、或は離在して別個の世界をつくる個物と見られ、或は實的に物に内在する基體或は物の成分と見られ、また或は、心の中に現前的にある表象と見られるのである。それらは「このこれ」といふ性格を、かの第三項に負わせるそれだけの方法である。一

般名辭が、本來もつものは、その「意味」である。ある一般名辭が、どの特定の個物を外延的に指し、その名でありうるかは、その名辭にふせられた意味から定まる。述語的一般名辭にとつては、「……の名である」ということは、「……を意味する」に對して、飽くまでも第二次的であるといわねばならぬ。一般名辭によつて意味されるものは、どの特定の二つの個物でもなく、先の第三項、即ち個物がその知られることに於いてそこへ超えられるそのものである。

しかし、この様に、第三契機という様な奇妙なフレーズを用い、述語的名辭の意味というもの何らか、固定的なものとして先取しない工夫をして見ても、また個物を離れ、言語的表出に即して問題を考えることに努めて見ても、ここに於いてなお、意味が、語によつて「持たれる」何かとして、物のすがたをとらうとする傾向は頑強に残つてゐるのである。一般語の本來の機能は、「を名指す」、「の名である」ではなく、「を意味する」という獨特の状況であるといつては見ても、そこには、「……を意味する」という云いまわしにおける「……」が、對格として固定されようとする傾向が依然として残つてゐるのである。尤も私たちは、「*x*を意味する」というフレーズの*x*は、常に、何らかの言語的表出によつてのみ置きかえられ、もはや概念そのもの、第三契機そのものではないという風に考えることもできる。表出となれば、それが固定的な對格的存在者であつて、少しも差し支えあるまい。

しかし、この傾向の頑強さを軽く見ることはできぬ。一般名辭の本來の機能を、固有名詞の機能から區別しないことが、第三契機そのものを全體として、物の方向へ向わせ、凝固させた第一の理由であるとは云つても、「を意味する」という語の峻かさ實體化への誘惑は餘りにも強い。また私たちの言語習慣は、例えば「空間と呼ばれる概念」とか、先に「第三契機と私たちが呼んだあるもの」とかいう例でも分る様に、どこまでも、ことばは何かを呼び、呼ばるべき何かを名指すものだとすることを指示して止まないものである。こういう事情に臨んで、言語が何程か實在の描像を與えようと考えられる限り、私たちは、實在説や概念説のいう所に却つて何らかの眞實があるのではないかと問う餘地は残しておくべきであらう。そして無時間的な個物や、内的對格としての概念の名が、述語的名辭であるといふ

主張によつて來る理由をも十分に考えて見ねばならぬであろう。この點からしても意味問題を普遍問題から照らし直して見る理由は十分に保證されていると思われれる。

さて、普遍について、また概念についての考察は「意味問題」にどの様な示唆を與えうるであらうか。

第一には、「ことばのもつている意味とは一體何であるか」と問う場合、私たちはことばに對應して、何らか對象的な存在者先取しない様に注意すべきであろう。上來の考察は、まず何よりも、普遍や概念を、表象的に、即ち固定的な存在者、あるいは對象的な「かたち」——心の中にあるものとしても——として捉える場合に生じてくる本質的な困難を示したと思う。

次に私たちの考察は、普遍ないし概念が一般名辭に應ずるとされる際、普遍は、消極的に、「かたち」として固定されるべきでないと共に、積極的に、何程かそこに、「はたらき」という契機がは入つてくることを示した。そこでこのことは、第二に私たちが、「意味とは何か」を考える場合、當然、ことば（名辭）を、普遍とは働きであるという見地から考え直して見るべきことを示すであらう。そして、特にこの「はたらき」とはことばに對し、自身どの様にかかわりゆく働きであるかが主題的に問われてよいであらう。即ち、述語的一般名辭によつて意味せられるものが、かの第三契機であるとして、また、この第三契機は何程か知る主體の働きに成りたつと考えられるとして、この働きとは一體如何なる働きであるか。たとい、これが述語的、一般名辭にのみ應ずる意味として、意味問題の中の一部にすぎないにしても、私たちは、この働きが比較、抽象に成り立つという事ではもはや済ましえない所まで問題を見てきたと思う。

勿論また、多數個物間の、事實的な「通い」が、この第三契機に何程か與つているとすれば、この通いとは一體如

何なるものであるかが、當然意味問題の角度から改めて問わねば問題となる。この通いが、多數個物間における同一成分の共有ということに済ましえないことも、略々明かになつたと思われる。

この二つの問題は、もとより容易な問題ではない。普遍とは何であるか、概念とは何であるか、また意味とは何であるかの問いに答えることは、結局上の二つの問いに一擧に答えることでなければならぬ。その限り、私たちの考察は、たしかに最も古い問題を、たゞトホををかえていい直したにすぎないのである。

ただ私は、かの第三契機に参加する主體のはたらきとは一體如何なるはたらきであるか、というはじめの方の問題について、次に若干の見通しを述べ、そこから「普遍」「概念」「意味」という三つの名辭の聯關を今少し明かにしておきたい。

註(一) cf. C. E. M. Joad: *A Critique of Logical Positivism* (1950), Brand Blanshard: *The Nature of Thought* (1939).  
分析學派に對する不滿をのべたものは、種々あるが、分析學派の人に逆ねじを取られそうなのが少なくない。一番簡潔で、要點をついているのは、古く一九二〇年にジョアキムがラッセルに對して(上掲の『意味の意味』)についてのシムボジウムにおいて)述べた批評であると思ふ。

(二) *Catagorema* と *Synkategorema* とのこの區別は、ストア派に由來すると推定されている。なお適切な譯語が見出せないので原語のまゝにして置く。

## 九

かの第三契機の中に、主體の「はたらき」が見出されるとすれば、それは、「普遍」「概念」「意味」の中、とりわけ「概念」ということばに應ずると思われる。六までに於いて表象的な「かたち」と見らるべきでないと思はれるものも、特に、主體の意識に即するものとしての普遍、即ち抽象的一般概念であつた。經驗的一般概念が、働きてあることを端的に示す最も身近な事實として、私たちはまず知覺體驗に含まれた分類作用、再認作用を取りあげて

見よう。

既にヒュームに關して注意した様に、知る主體は、知られる個物に出合う場合、ただ、印象を受容するに止まらず、その機會に絶えず自己の性狀を形成してゆくと考えねばならない。二度同じものに出合うといつても、後の出会いに於ける主體は、先の出会いからして既にある變化をうけているのであり、従つて、出会いそのものも異つていなくてはならない。私たちが如何なる個體に出合う場合にも、私たちは云わば過去の經驗の全體をもつて、その個體を出迎えるのであり、その個體の方は、知る主體を形づくつてきた經驗によつて、常に何らかの解釋をうけつつ出合われるのである。私たちが、過去の經驗から獲得した性狀は、新に眼前に立ち現われる個物をどの様にか解釋する原理として働くであろう。従つて出合われる個體が何として、經驗されるかは、いつも私たちが過去の經驗から得た性狀に依存して、またそれに對して、決められるといわねばならぬ。

この様な解釋のちから、或は再認の機能を、經驗的一般概念と考へ得ないであろうか。私たちが、「人の概念をもつている」ということは、ある個物に出合つた場合に、それを「人として」(或は「人でないとして」)再認するということである。概念とは經驗に際して、出合われた個物を、「何かとして」現われさせるこの機能であり、個物が、その都度「何かとして」出合われるその「何か」は、そもそも主體に於けるこの可能性にはありえないと思はれる。あらゆる知覺はこの意味において既に再認である。

現在で完結した知覺がまず與えられ、それがついで事後的に比較され、その類似、異同がたしかめられるということはない。物は豫め、何かに似たものとして、或は私たちが既にそれに對してある態度を取つたことのある或る物として、従つてそれが何かに類似するその點に關して、まず知覺もされうるのである。ある物の概念は、かかる能性、ないし働きとして、そのものの經驗に先立つ面をもつてであろう。また、物と物との類似を豫め建てるという面を持つてであろう。概念は、個物がそこで出合われうる地平を準備するのである。従つて概念は本來表象といわるべきものでは

ない。概念は、個物に出合うというそのことにおくれることなく、既にその個物を分類し（然るべき他の個物と共に集合させ）、何かとして認めうる可能性、或はちからである。

概念が「知る」作用に含まれるのは、かかる再認の機能としてであり、この様な仕方では、先の知る個物と知られる個物との間に介入する第三契機たりうるのである。概念は可能性である。

しかし、かかる概念は、個物を何かとして出合わせる力ではあつても、出合われる個物の姿、ないし直観される獨特な規定を、全的に創り出し得るものでもとよらない。個物は、それが何として知られようと、その「何」には盡くされず、これを無限に溢れ出す點に於いて正に個物であるであらう。はたらきとしての概念は、ただ個物を、常に他のある個物（同じ名で呼ばれる）との通いに於いて出合わせる可能性にすぎぬ。その通いの可能性に、個物に属する客體側の制約（所與性）を否定することはできないであらう。また概念（の力）は、似ぬものを似させることまではできないであらう。しかも互に似ているとされる諸個物は、概念を介することなしには互に似ることもできないとなお云いえないであらうか。

次に、概念は、圖式心像を形づくりうる可能性としても、すぐれて働きとして捉えられうる。私たちが犬の概念をもつてゐるということは、カントも教えた様に、私たちが犬の圖式を表象的に描きうるということであらう。圖式は形象そのものではない。しかし、これは表象と正當にいわべきものである。名辭をいくつか重疊し形容を重ねることによつて、表象は細部的に益、限定を加えてゆく。しかし、いづれ圖式である限り、ある自由度を残してゐるであらう。概念は、それ自身が表象（かたち）ではなく、むしろ、表象を然るべき仕方で行つてくることの可能性と見られ<sup>10</sup>。

そこで、概念はそれ自身はたらきでありながら、自らを直観化し、この途によつて事實自己を對象化すると考えられないであらうか。概念の姿を見ようとすれば、そのはたらきが抑止され、對象化された所を注視するほかはない。

ホップスやバークリが一般語の指示物として捉えたのはこの自己對象化に於ける概念であつたと思う。ヒュームは心像の交替可能性ということによつて圖式の自由度ということを見ているのである。

勿論、こゝでも概念自身が、質的な直観實質を全的に創り出すと考えることはできないであらう。概念はカントの言葉で云えば綜合の規則にすぎず、構想力を指導する規範に止まるというべきであらう。しかし、カント自身が「悟性、圖式機能」ともいつている様に、概念は自己を直観化し、自らを對象となしうる様な、そういう力ないし働きと見ることができると思う。

この様に考えることができるとすれば、先に、概念が、再認しつゝ主體に個物を出合わせる働きであるといつたことの中にも、概念の自己對象化ということが含まれていたと考へるであらう。主體が質的な「もの」に、それを何かとして解釋しつゝ出合うという場合には、概念が、所與の直観によつて云わば充實されるといふべき事情がある。(直観なき概念が空虚であるということもこの事情をあらわすものであらう。)客體的個物の具體的な姿は勿論客體の側から提示される。しかし、先にいつた様に、その様な姿は、既に何かとして解釋され意味づけられつゝ、ただその再認の地平に於いてのみ現われてくるのである。ここには、個物のすがたを、當該の面に於いて、何かとして再認し、捉へることに於いて、同時に概念が自己をその客體の姿の中へ投げ入れ、事例に即して自己を表出しているといつてよい事情があるであらう。概念が固定した姿を何らか取るものとするればそれは、自己を直観の中に表すことに於いてである。

この様に見てくれば、概念と言語的諸形象との關係の中にも、はたらしきの自己對象化を見えないであらうか。概念は、外言語的なものであるものとしては、働きでありつゝ、本來、言語の中に於いて、その形を取る様なさういふ機能であると云いえないであらうか。

語である音聲や、文字形象は、それ自身としては質的與件であり、直観實質である。同じ語でも、個々の感覺的

直觀實質としては、一つ一つ違いがあり、全く同一のものは云えない。異つた人によつて、又同人によつても、異つた時に、發音されたある音聲が、それ自身異なつており乍らある一つの語である爲には、それらの音聲自身、再認的に知覺され、分類され、固定を受けねばならぬ。その限り「聲の風」も、それ自身、單純に特殊ではない。併しさらに全く無意味な音聲や視覺形象ではなく、意味ある語として用いられた音聲や形象が、かかる再認、固定に對して格別有利な事情におかれていることは、私たちが——殆んどこの事實に氣づかぬ程にも——身近かに體驗している事實である。また文字や、發音された語の認知の難易の度が學習（習慣）によつて著しく異なることも、指摘するまでもあるまい。概念は、出合われる對象的個物を解釋することにおいて自ら姿をとると共に、個々の「聲の風」の解釋の中にも自己を引きとめる。概念は、言語の中へも、自己を直觀化し、客觀化することができる。また、實質的客體の直觀の場合におけるとは異つた仕方になつておられるにせよ、「聲の風」によつてやはり充實されると考えることができる。概念は圖式化機能とともに象徴化機能をもつ。表現されぬ思想もやはり空虚である。

一般名辭は決して概念の名ではなく、その表現である。「聲の風」は概念を意味するであらう。しかしそれを名指すのではない。

この様に、概念が、はたらきと見られるとして、これが「もの」と「ことば」との兩方向へ自己を客觀化する様なそういうのはたらきであるとすれば、「普遍」とか「意味」とかという語が、概念のかかる客觀化された側面を表すと見ることが許されるであらう。「普遍」という語は、先の第三契機の客體の側に即した、何らか個物的な、固定的な相を示す語として、また「意味」という語は、言語的表出に即し、それに附着した相を示す語として、それぞれ保存されて然るべき根據がある様に思われる。

そこで、私たちの限つた領域（知る主體の側からの働き）に關する限り、普遍、概念、意味というこの三者は、一つの同じものの異つた側面と見ることが出来る。それらは私たちがものを知るといふことの中に含まれるかの契機

を、異つた聯關において捉えたものにすぎない。普通とは、知られる物（主語的なる個物）に即して見られたこの契機であり、概念とは知る個物に即して見られた同じ契機である。そして意味というのは、この契機の、言語的表出に即した相にほかならない。普通が概念説によつて概念にすぎぬといわれ、また一般語の意味にほかならぬと云われる（アベラルドゥスやロック）理由は事象に根ざしている。三者はもと同じものであるから。しかしこの同じものがこの三つに分れ、三つの名をもつ理由もまた事象に根ざしている。「知る」ということは、知る主體、知られる客體、第三項、そして對象的認識を述べる言葉という契機からなる全體であつて、互に支え合い、そのどの一つをも切離すことはできないと考えられるからである。そこからしてまた、この第三項を普通、概念、意味のいずれとして語るうとする場合にも、結局當座の支點ならざる他の契機が掩きこまれてくるのである。

意味とは、言語との聯關において見られた普通であり、普通とは、物に即して見られた意味である。 （完）

註（一） パースによつて提唱された、所謂 *sinsign* と *legisign* との區別。

（筆者 大阪市立大學文學部「哲學」講師）

---

# ENGLISH OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

---

*The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article*

## Universals, Concepts and Meaning

by Mitsuo Moriguchi

1. What is meant by the word 'meaning'? The quest for meaning is one salient key-note of 20th century's philosophy. Putting aside methodological or technical aspects, certainly the most controversial to-day, of the problem, we would rather shed light on the problem from the angle of 'universals-problem'. 2. Descriptions (in Mr. Russell's terminology) are marked out as the proper domicile of universals, with brief remarks on the relationist aversion to the subject-predicate form of propositions. 3. Realist, conceptualist and nominalist answers to the Porphyry's question are sketched to the effect that the last one (literally taken) having hardly existed, the so-called nominalists' defiance against unduly neglecting language should be appreciated. 4. Then, we examine the most prevalent conception of concepts which takes them for a kind of *representation* i.e. determinate forms set before mental eyes, immanent within our mind. Abaelard's conceptualism, Thomist and Scotist realism, and Cartesian modern idealism all share this way of seeing concepts. Critical analysis of '*esse objective in intellectu*' suggests us that concepts as such may be, as Ockham scented, something other than definite, static entities. 5. Hobbes' and Berkeley's casting off abstract general ideas on the basis of imagism is shown to raise up two problems anew: (1) about the nature of resemblance and (2) about functionate or operative aspects of general ideas. 6. The Resemblance theory and the Identity

theory brought face to face, some advantages of the former are ascertained. 7. But our examination of Hume shows that the apprehensibility of resemblances presupposed even by the Habit theory comes out as a serious difficulty which any empiricist framework can never solve. Two possible ways of avoiding this difficulty are hinted: (1) the Kantian transcendentalist assertion that functionate concepts themselves establish all affinities among objects, and (2) the Phenomenologist and Whiteheadian rehabilitation of realism where universals are made to be intuited (prehended) by some eidetic sight (by abrupt realization). 8. A further notice added on functionate concepts in respect of a delicate, care-laden confusion of 'named' and 'meant' which categorematic terms are liable to, while proper names as well as syncategorematic words are safe from. we conclude that concepts as such are functions in so many ways as they are objectified in two directions, real and symbolic. There is some good reason to retain three words 'universals', 'concepts' and 'meaning' in so far as we can say universals are meanings embedded in concrete reality, meaning universals woven in linguistic elements.

\* For the Japanese original of this article, see Vol. XXXVII, No. 7, 9, 10 & 11

## A Study of the Moral Philosophy of Kant

by Takuji Kadowaki

Kant's moral philosophy ought to be discussed with reference to his philosophy of history. It has often been said that his moral philosophy is too formal and rigoristic, but such a criticism is due to the misunderstanding of his formalism in respect to the moral law. The moral law in its negative aspect presents to us a 'form of universality', but it also has the positive character of 'intelligible causality' as its positive one. Of course, the latter cannot be made intuitive for us human beings, but the 'law of nature', as a symbolical *Typus* of it, gives us